

秋田の皆さんにとって、

「森」は陸上の森しか意味しないかもしれませんが、海と暮らしてきた私には、「海の森」つまり、水産増殖に役立つ大型海藻の森があります。窒素やリン、二酸化炭素(CO₂)を吸収して酸素を排出し、海の生物の付着基盤となり、地場の生物多様性を豊かにし、産卵場や揺籃場ともなりま

す。戦後、これらは埋め立てや護岸、不適切な排水で破壊され、沿岸は磯焼けになり、赤潮の被害も減らず、漁民数も漁獲量も減っておりま

き、海藻養殖を強化しました。

その結果、沿岸漁獲量は、その後1200万ト強に落ち着いています。また、この80年代の沿岸漁獲量の増加は、コンブなど日本から輸入された海藻養殖技術に基づく養殖生産量の増加と非常に高い相関関係にあります。つまり、海藻養殖の増殖効果が想

ト(戦後ピーク時で60万ト弱)、沿岸漁獲量は129万トでした。

私は、「海の森づくり」の仕事に、1994年から関わっており、定年退職後、妻の実家がある秋田にきました。秋田で何かできないかを考えていたとき、秋田県、男鹿市、男鹿森林組合主催の「ハタハ

もう一つの森づくり

まつだ よしあき
松田 恵明

定されます。このようにして水産大国中国が新しく誕生しました。

残念ながら、日本には海藻養殖の増殖効果を考える人があまりおりません。2009年の中国の海藻養殖生産量は1千万ト余、沿岸漁獲量は1260万トですが、日本の海藻養殖生産量は、たった46万

を打ち出しました。私たちのところにも秋田県のために何かできることはないか…と共通の意思を持った人たちが名乗りを上げ集まって来ております。

私たちの海の森づくり支援事業は、種糸や海洋施肥剤等資材のあつせんと、自力更生を中心とした漁村地域活性化に関する勉強会の開催です。

これまでの経験から、鹿児島県錦江湾以北の漁協では、大型海藻コンブ促成栽培種の冬の養殖は可能で、半年で1枚100〜200g(湿重量)

のコンブが生産されます。コンブを養殖すればアカモクなど天然の藻場が回復してきた長崎県壱岐東部漁協の例も経験しております。海藻養殖と海洋施肥を組み合わせて、海の森づくりを契機に勉強会を開催し、多面的機能を持つ漁村の第6次産業化を図ることができれば、「海」は「宝の

海」に変わり、雇用機会は生まれ、漁村は活性化し、過酷から脱却できると信じております。東日本大震災や東京電力福島第1原発事故を経験して、森、川、海、国土は循環システムであり、これを一休として考える時代になりました。

日本の特徴は、海です。特徴を生かさずして、日本の由来はありません。漁村の活性化は、海を生かす最重要課題であり、国民の責任でもあります。秋田県の特徴は第1次産業です。秋田魁新報の読者の皆さん！秋田県を自然との共生を目指す第1次産業を中心とした第6次産業基地に育て上げ、起死回生を迫られている日本の魁を目指そうではありませんか？

(秋田市、鹿児島大学名誉教授、NPO「海の森づくり推進協会」代表理事、71歳)